

中年後期における亡き親と自分の生き方のとらえ方の検討
－ 成人期以降に親を亡くした 50 歳代・60 歳代の語りから－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
田原 操

本研究の目的は親を亡くすことでの中年後期（50～60 歳代）の心理的变化、発達、成熟の推移を検討することである。今回の調査では成人期以降に親を亡くした 50～60 歳代の男女 8 人に半構造化インタビューを行い、得られたデータを概念化し、分析を行った。その結果、亡き親のとらえ方は「肯定的評価」「否定的評価」「両価的评价」「理解」の 4 つの上位概念が抽出され、親の死後、肯定、否定を包摂し、親そのものを理解しようとする姿勢が示された。親と自分の生き方の対比は「モデル（手本・そういうもの・反面教師）」「別格（劣等感・独立独歩）」「対比なし」の 3 つの上位概念が抽出された。これより、中年後期においては、親の生き方を自分の生き方と対比しながらも、自分は自分であることを意識していることがわかった。また親の生き方をモデルにして、次世代や社会の未来を育む「世代性（generativity）」が確かめられた。なお、中年後期において、亡き親の生き方を語ることは、親の全体像をまとまって考える、或いは親に対する多角的な見方ができるようになったことに気づき、自分自身や次世代についての内省を深める機会となっていた。